【総説】

効果的なデート DV 予防教育実施に関する日本語文献レビュー

The Elements of Effective Education for Preventive Dating Violence for Students : A Review of the Japanese Literature

寒水章納　福岡看護大学　看護学部看護学科　地域・在宅看護部門

抄　　録

【目的】デート DV 予防教育の研究について文献レビューを行い、より効果的な予防教育実施へ向けた根拠を明確にするとともに、今後の予防教育実施について課題を明らかにし、内容を検討する。

【研究方法】医学中央雑誌を使用し、以下の条件を満たした論文 6 件を分析対象とした。1.検索対象期間：全年対象、2.検索キーワード：「デート DV」、3.研究デザイン：指定なし、4.論文種類：原著論文、5.論文内容：①デート DV あるいは DV 予防教育実施に関するもの、②対象者は中学生・高校生を含むもの、③総括ではないもの、④用語の定義が本研究と一致しているもの

【結果・考察】分析対象論文 6 件のうち、実態調査 3 件、介入プログラム実施 3 件であった。中学生への予防教育実施が最も効果的である可能性が高く、中学生と高校生ではプログラム内容を変更する必要のあることが示唆された。効果的な予防教育実施のためには実施前に実態把握を行い、性差を意識した授業内容を組み立てること、また教職員へのアプローチが必要であることも推察された。

キーワード：デート DV　予防教育　中学生　高校生

緒　　言

デート DV(Dating Violence)は結婚をしていない関係性の中で起こる暴力のことであり、恋愛という特異な性質から当事者以外の介入が難しく、若い世代にとって重大な事件に発展する可能性のある社会問題である。また恋愛期間を経て結婚後の夫婦間で起こる暴力(DV: Domestic Violence)は、しばしば結婚前から始まる傾向がある [1)2)]と言われており、デート DV を予防することは若い世代にとって有益であるのみならず、DV 防止の一端として非常に有効である。以上のことから効果的なデート DV 予防教育(以下、予防教育)実施を目指し、被害・加害の実態調査や教育プログラム開発に関する研究が少しずつ行われている。しかし効果的なプログラム実施について、対象者の選定や予防教育実施の時期、予防教育実施回数、プログラムの内容について総括的に分析された研究は行われていない。

そこで本研究では予防教育の研究について文献レビューを行い、より効果的な予防教育実施へ向けた根拠を明確にするとともに、今後の予防教育実施についての課題を検討することを目的とした。

なお本研究ではデート DV を「結婚をしていない、親密な関係にある人からの暴力」[3)]と定義し、デート DV 予防教育の位置付けについては、人権教育の一環として実施される予防教育とする。

研究方法

2017 年 12 月に文献検索を実施した。データベースは医学中央雑誌を使用し、以下の検索条件を全て満たした論文を対象とした。

I.検索条件

1.検索対象期間

検索期間は全年対象とした。

2.検索キーワード

「デート DV」で検索を行った。

3.研究デザイン

検出される論文が少数であったため、研究デザインの指定は特に行わなかった。

4.論文種類

原著論文にチェックを付け、検索結果をそのまま使用した。また国内外において、デート DV に関する法整備の状況、被害者・加害者に対する対応方法、予防教育実施の状況などが異なるため、今回は日本語のみを対象とした。

5.論文内容

論文内容について、以下の条件を満たしたものを採用した。

①デート DV あるいは DV 予防教育実施に関するもの：性教育のみは除外

②対象者は中学生・高校生を含むもの

③総括ではないもの：他文献内容の検討が主となっているものは除外

④用語の定義が本研究と一致しているもの

上記 1～5 のすべてを満たした論文を取り寄せ、精読した。なお本研究では参考・引用文献の確認作業と追加は実施しなかった。

II.文献検索の方法(図 1)

検索条件 1～4 を満たした論文は 64 件であり、抄録を精読した結果、デート DV 予防教育以外の内容であった 42 件は除外した。また中学生・高校生以外の対象 14 件、他論文の内容検討となっている総括論文 1 件、本研究と用語の定義が異なる 1 件を除外し、最終的に分析対象は 6 件となった。

倫理的配慮

本研究は文献が対象であるため、倫理審査を受審していない。文献の抽出および整理にあたっては、特定の文献に偏らないこと、著者の意図を損なわないことに留意し、分析を行った。

結　　果

6 件の論文概要を表 1 に示した。6 件のうち、実態調査は 3 件、介入研究は 3 件であった。表 1 は著者、論文タイトル、研究目的、研究デザイン、対象者、質問紙内容(実態調査の 3 件)、プログラム内容(介入プログラム実施の 3 件)、結果の順に記載した。

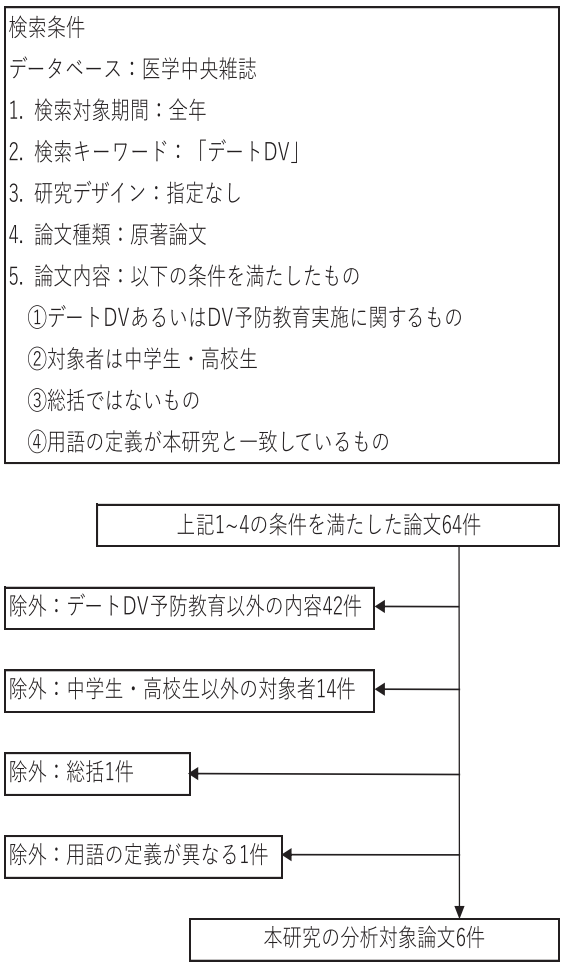

図 1　対象論文の抽出

カテゴリー別結果を表 2 に示した。「対象者」では中学生が被害者・加害者となる実態が明らか[4]となっており、高校生では 3～4 割に被害・加害体験のある[5)6)]ことが示された。また中学生では暴力認識に差があり、性暴力についての認識は低い[7]ことが明らかとなった。中学生と高校生を比較すると年齢が高くなるにつれ、デート DV への意識・関心が高まっている[4]。「プログラム内容」の「暴力の認知」では、暴力の認知に性差がある[5)6)]こと、社会的・精神的暴力は認知していない[6]ことが明らかとなった。

表１　論文の概要

NO	著者	論文タイトル 雑誌名.年.巻.頁	研究目的	研究デザイン	対象者	質問紙/プログラム内容	結果
1	山田 典子, 山田 真司	高校生のDating violenceの特性と課題 母性衛生, 2010, 51巻, 2号, P311-319.	高校生におけるデートDVの特性を探り、その課題を明らかにする	横断的調査 デートDV予防教育事後アンケート	高校生	デートDV予防教育「思いやりを考えるハイスクールセミナー」	・被害・加害経験は男女共に4割以上 ・相談した相手は「友人」が最も多く「親」「先生」の順に多い ・「被害の軽視」「被害者の羞恥や自責」「あきらめや不信」という理由で被害者の2割しか相談していない ・相談しなかった理由の中に「(相談したことが)ばれたらもっとやられる」「仕返しが怖かった」など少数ではあるが深刻な被害を疑う回答がある ・少数ではあるが深刻な性暴力を受けている生徒がいる ・暴力の認知に性差がある
2	武田 道子, 大西 和子	高校生のデートDVに対する認識および経験の実態 日本看護学会論文集：地域看護, 2012, 42回, P151-154.	高校生のデートDVに関する意識や加害体験及び被害体験の実態を明らかにし、予防的取り組み方法を検討	質問紙調査	高校1年生	(1)基本属性 (2)デートDVに関する知識の程度と情報源、デートDVに関する認識、男女交際の有無、被害・加害体験(男女交際経験者のみ)	・交際経験のある者のうち3割強に被害・加害経験 ・「メールや着信をチェックする」「借りたお金を返さない」「何を言っても無視する」は男女ともに暴力として認知していない ・男子は「殴ったりけったりする」「避妊に協力しない」「無理やり性的な行為をする」の3項目で「暴力に当たると思わない」と答えた割合が女子より多く、暴力認知に性差がある ・情報源はテレビ・ラジオ・授業・本・ポスター・冊子の順
3	永松 美雪, 原 健一, 中河 亜希, 中野 理佳	性行動に伴う危険を予防するプログラムの効果　性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組み合わせて 思春期学, 2012, 30巻, 4号, P365-376.	性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組み合わせた効果を明らかにする	プログラム実施後の質問紙調査	中学生	介入群：性感染症予防教育＋男女交際中の暴力予防教育 対照群：性感染症予防教育	介入群は対照群と比較して、教員との会話の頻度を増やし、男女交際中の暴力の認知や性感染症の知識を高め、男女の対等な関係・相手を思いやること・自分を思いやることの意識を高めた
4	小澤 美咲, 長谷川 博亮	思春期・青年期におけるデートDVに関する意識と実態調査 デートDVへの看護介入のあり方についての1考察 日本精神科看護学術集会誌, 2013, 56巻, 2号, P311-315.	中学生・高校生・大学生のデートDVの認知度・意識・関心および実態を明らかにし、デートDVへの看護介入のあり方を考察	質問紙調査	地方都市の中学生・高校生・大学生	(1)基本属性 (2)デートDVの認知度・意識・関心、情報源、被害・加害経験 (3)デートDVへの暴力意識	・デートDVの因子は「束縛・独占的行為」「ハラスメント的行為」「威圧的行為」 ・年齢が高くなるにつれ、デートDVへの意識・関心が高まる ・デートDVの情報源は、「学校の授業」「テレビ」「本や雑誌」の順に多く、「その他」では中学生は大学祭、高校生は学校からの配布物、大学生はパンフレット・講演であった ・中学生が被害者・加害者となる得る実態が明らかとなった
5	須賀 朋子, 森田 展彰, 斎藤 環	高校生へのDV予防に向けての介入研究 思春期学, 2014, 32巻, 4号, P404-412.	中学生向けのDV予防プログラムを高校生に試行し、中学生と高校生の効果に違いがあるかを検討	介入群と非介入群を設定し、介入前後と1カ月後に質問紙調査を実施(非介入群は実施前と１カ月後のみ)	進学高校の生徒1,2年生	須賀ら作成「お互いを尊重し合う教育プログラム　人間関係を大切にするためーDomestic Violenceを知るー」のスライド教材（15項目で構成）	「関係性の問題」 プログラム実施後には上昇、1カ月後には下降→中学生は下降せず、プログラムの効果を維持できた 「威圧的行為」 プログラム実施後には上昇、1カ月後には下降→中学生と同様の結果
6	永松 美雪, 原 健一	中学生における親密な相手からの暴力認識を高める要因　お互いを尊重する意識の高さと慎重な性的態度 母性衛生, 2015, 55巻, 4号, P752-758.	中学生において、お互いを尊重する意識の高さや慎重な性的態度が、親密な相手からの暴力認識を高める要因になっているかを明らかにする	質問紙調査	中学生2,3年生	(1)親密な相手からの暴力認識：身体的暴力4項目、精神的暴力5項目、性的暴力1項目 (2)男女交際でお互いを尊重する意識：「男女の対等な関係はどの程度大切だと思うか」などの3項目 (3)思春期における性的態度：中学生・高校生・将来における性的態度の3項目	・ 暴力認識は内容によって程度が異なる 特に精神的暴力において間接的に苦痛を与える暴力は認識されにくく、性暴力について認識できた割合が低い ・「自分を思いやること」が大切であると答えた生徒の割合が少ない ・ 男女交際でお互いを尊重する意識が高いこと、慎重な性的態度は親密な相手からの暴力認識を高める暴力の予防要因となっている

表 2　カテゴリー別結果

カテゴリー	サブカテゴリー	対象者	結果	著者
対象者		高校生	・被害・加害経験は男女共に4割以上 ・少数ではあるが深刻な性暴力を受けている生徒がいる	山田ら 2010
		高校1年生	・交際経験のある者のうち3割強に被害・加害経験	武田ら 2012
		地方都市の 中学生・高校生・ 大学生	・年齢が高くなるにつれ、デートDVへの意識・関心が高まる ・中学生が被害者・加害者となり得る実態が明らかとなった	小澤ら 2013
		中学生2,3年生	・ 暴力認識は内容によって程度が異なる 特に精神的暴力において間接的に苦痛を与える暴力は認識されにくく、性暴力について認識できた割合が低い ・「自分を思いやること」が大切であると答えた生徒の割合が少ない	永松ら 2015
プログラム内容	暴力の認知	高校生	暴力の認知に性差がある	山田ら 2010
		高校1年生	・「メールや着信をチェックする」「借りたお金を返さない」「何を言っても無視する」は男女ともには暴力として認知していない ・男子は「殴ったりけったりする」「避妊に協力しない」「無理やり性的な行為をする」の3項目で「暴力に当たると思わない」と答えた割合が女子より多く、暴力認知に性差がある	武田ら 2012
		地方都市の 中学生・高校生・ 大学生	・デートDVの因子は「束縛・独占的行為」「ハラスメント的行為」「威圧的行為」	小澤ら 2013
	情報源	高校1年生	・情報源はテレビ・ラジオ・授業・本・ポスター・冊子の順	武田ら 2012
		地方都市の 中学生・高校生・ 大学生	・デートDVの情報源は、「学校の授業」「テレビ」「本や雑誌」の順に多く、「その他」では中学生は大学祭、高校生は学校からの配布物、大学生はパンフレット・講演であった	小澤ら 2013
	相談	高校生	・相談した相手は「友人」が最も多く「親」「先生」の順に多い ・「被害の軽視」「被害者の羞恥や自責」「あきらめや不信」という理由で被害者の2割しか相談していない ・相談しなかった理由の中に「(相談したことが)ばれたらもっとやられる」「仕返しが怖かった」など少数ではあるが深刻な被害を疑う回答がある	山田ら 2010
プログラムの効果	効果の持続	進学高校の生徒 1,2年生	「関係性の問題」 プログラム実施後には上昇、1カ月後には下降→中学生は下降せず、プログラムの効果を維持できた 「威圧的行為」 プログラム実施後には上昇、1カ月後には下降→中学生と同様の結果	須賀ら 2014
	効果を高める要因	中学生	介入群は対照群と比較して、教員との会話の頻度を増やし、男女交際中の暴力の認知や性感染症の知識を高め、男女の対等な関係・相手を思いやること・自分を思いやることの意識を高めた	永松ら 2012
		中学生2,3年生	・ 男女交際でお互いを尊重する意識が高いこと、慎重な性的態度は親密な相手からの暴力認識を高める暴力の予防要因となっている	永松ら 2015

「情報源」では、学校の授業やマスメディアが主な情報源となっている[4)6)]ことが示された。「相談」では被害者の 2 割しか相談に繋がっておらず[5)]、相談先は友人が最も多い[5)]ことが確認された。「プログラムの効果」の「効果の持続」では、中学生と高校生を比較すると「関係性の問題」因子については中学生が効果を維持できた[8)]結果が示されている。「効果を高める要因」では性感染症予防教育との組み合わせプログラム実施は、男女がお互いを尊重す

る関係を育成する教育プログラムの単独実施より効果的である[9]ことが明らかとなった。

考　　察

【対象者】

中学生では暴力認識に差があり、性暴力についての認識は低い[7]こと、年齢が高くなるにつれ、デートDVへの意識・関心が高まっている[4]こと、また各々の成長発達段階を考慮すると、高校生への予防教育実施が最も効果的であるようにみえる。しかし中学生が被害者・加害者となる実態が明らかにされている[4]こと、初めて被害を経験した時期は高校1年生が最も多い[10]ことなどから、恋愛経験や性行動に至る前の中学生への予防教育実施が最も効果的である可能性が高い。

また中学生は「自分を思いやること」が大切であると回答した生徒の割合が低く[7]、思春期特有の自己肯定感の低さが浮き彫り[11]となっている。福島らは中学2年生への偏ったジェンダー意識や低い自尊感情が将来DVを引き起こし、DVを暴力と認識できない可能性に結びつく[10]としており、このことも中学生への予防教育実施の重要性を裏付けている。

【予防教育実施の時期と実施回数】

今回予防教育実施の時期と実施回数について、根拠となる結果を得ることは出来なかった。時期については他論文の「高校を卒業するまでの間」が妥当である[12]とする見解もあり、今後の統計学的な調査が必要である。

【プログラム内容】

「暴力の認知」について、男子では「殴ったりけったりする」「バカにしたり傷つく言葉を言う」「避妊に協力しない」「無理やり性的な行為をする」の項目で女子より暴力認知度が低い結果が示されている[6]ことから解るように、暴力の認知に性差があり[5][6]、間接的な暴力は認知されにくい[7]、社会的・精神的暴力は認知されにくい[6]という結果が得られている。暴力の種類・内容に関するプログラムでは性差を意識した説明が求められる[13]。加えて、直接的な暴力と異なり、間接的な暴力はイメージが付きにくい側面を考慮し、若い世代に起こりがちな間接的暴力の事例を組み込む必要性もある。また社会的暴力は若い世代に特徴的な暴力であり、女性から行われる暴力として大きな割合を占める内容である[3]ことから、暴力の種類に関する説明部分の中で最も時間を取るべき箇所であろう。

「情報源」について、学校の授業やマスメディアが主な情報源となっている[4][6]ことが示され、外部講師による出前講座形式の予防教育についてもその効果が期待されるところである。また「その他」の項目では中学生は大学祭、高校生は学校からの配布物、大学生はパンフレット・講演から情報を得ている[4]ことが明らかとなり、予防啓発の一環として県が実施している全高校1年生へのパンフレット配布[14]も効果的であることが示された。しかし中には配布を忘れ、パンフレットが放置されたままになっている学校もあり[3]、パンフレットの効果についても周知されるべき項目である。

「相談」について、青年期は「心理的離乳」が生じ、生活範囲が家庭外へ広がり、両親よりも友人が身近な存在となる[15]ため、相談先ではやはり「友人」が多い[5][16]ことから、友人に相談されるかもしれないという設定アプローチは思春期の生徒にとって有効である可能性が高い。また内閣府のデータでは相談しない理由として被害の軽視47.2%、自責34.1%、認識していない18.7%という結果が示されている[16]が、今回の結果でも「被害者の羞恥や自責」「あきらめや不信」といった理由が挙がっており[5]、信頼できる相談先があることや秘密厳守されることを伝え、実際に相談する場合のイメージが出来る具体的な内容の盛り込みが必要である。

【プログラムの効果】

「効果の持続」について、「関係性の問題」因子では、中学生と高校生では効果に差のあった[8]ことが示されている。長期的な効果を期待するのであれば中学生からの介入が必要であり、先述したように予防教育実施は中学生が最も効果的であることの根拠となっているが、なぜ差があったのか、その理由は明らかにされて

いない。このため、高校生へは段階的に繰り返すプログラムが必要である可能性のみ示唆[8]されており、中学生への予防教育実施回数について、また両対象における効果的なプログラム内容については不明である。さらにここでも予防教育実施直後は知識を正しく理解しており高い効果はみられるが、その効果が持続せず、知識の供給が個人の行動変容まで繋がらない課題[3]も示されている。

また2014年内閣府が出している統計データでは、被害にあった割合は交際経験のあった者のうち14.8%と示されており[16]、これと比較すると被害体験の割合が4割以上と多く示されている[5]。プログラム内で「携帯メールによるコントロールも暴力である」と説明したことに加え、交際関係にはない異性から受けた被害と行った加害も含まれている可能性がある[5]、と考察されている。しかしながら予防教育実施後に「被害に遭っているかもしれない」「加害行為を行っているかもしれない」という気づきを促すという意味では効果的な介入プログラムであったと評価でき、予防教育の効果を示している一つの結果である。

予防教育は性教育、ハラスメント予防、ジェンダー問題など、その位置付けによって内容構成が異なる。本研究では予防教育の位置付けを「人権教育の一環」とした。人権に対する基本的な考え方はどの分野にも通じるものであり、人権意識の低さがデートDVの被害・加害を生み出す一つの大きな要因となり得るからである。今回「効果を高める要因」について、性感染症予防教育と男女交際中の暴力予防教育を実施した介入群は性感染症予防教育のみ実施した対照群と比較して、教員との会話の頻度を増やし、男女交際中の暴力の認知や性感染症の知識を高め、男女の対等な関係・相手を思いやること・自分を思いやることの意識を高めた[9]、との結果が示されている。男女交際中の暴力予防教育のみ実施した対照群では検討されていないためプログラムの相乗効果について断言はできないが、2つのプログラム実施が単独の実施より効果的であった可能性は高い。しかし現状では、学校によって予防教育の位置付けが異なるため、こちらの意図する予防教育を実施できない可能性はある。人権教育の一環であっても「性暴力」部分では使用する文言や表現に制限のあることが多く、セックスをしている前提で話をしないでほしい、知識を植え付けないでほしい、という教職員からの要望も多く聞かれている[3]。性教育に関する理解が充分ではない教員が多いという指摘もある[17]ことから、性感染症予防教育と暴力予防教育との2つのプログラムを実施可能な段階に進めるには、まず教職員の意識調査を実施し、予防教育に関する知識を変化させるような介入が必要となる。

また男女交際でお互いを尊重する意識が高いことと、慎重な性的態度は暴力認識を高める[7]ことが明らかにされている。さらにお互いを尊重しあえる共感性を高めるプログラムは相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向を高めるという結果も報告[18]されており、人権教育の一環として「お互いに尊重し合う関係性の構築」を柱の一つとしている内容[3]の予防教育においてもある程度の妥当性が確保される可能性は高い。

以上のことから、効果的な予防教育実施のためには、まず性別構成や自己肯定感の程度、性行動の内容や恋愛事情などについて対象者の実態把握を行い、予防教育プログラムに反映させる必要性が示唆された。またニーズの高い対象者に現実的な解決方法を伝える必要のあること、対象者だけではなく周囲の大人が持つ予防教育に対しての意識の変化をもたらす介入が必要であることが示唆された。

結　　語

1. 中学生への予防教育実施が最も効果的である可能性が高い。
2. 中学生と高校生ではプログラム内容を変更する必要がある。特に中学生では自己肯定感を高める教育が必要である。
3. 予防教育実施前には対象者の実態把握を行い、性差を意識した授業内容を組み立てることが効果的な予防教育につながる。

4.実際に相談先につながるアプローチが必要とされる。
5.効果的な予防教育実施のためには教職員の意識に働きかける必要がある。

今回の文献レビューでは医学中央雑誌のみのソースしか使用しておらず、予防教育の効果について検証された論文を充分に網羅できたとは言い難い。また研究の問いであった予防教育実施の時期、実施回数について統計学的に検証されたものはなく、その根拠を示すことは出来なかった。今後は検索範囲を拡げ、知識の供給と行動変容の関連性、教職員の人権意識調査など、効果的な予防教育実施につながる文献検討を続けていく必要がある。

本研究において申告すべき利益相反事項はない。

引用文献

1.内閣府男女共同参画局(2014)：男女間における暴力に関する調査(平成 26 年度調査), http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-6.pdf, 2018.2.11
2.Foshee VA. Linder GF, Bauman KE, et al：The safe dates project. theoretical basis, evaluation design, and selected baseline findings, American Journal of Preventive Medicine, 12(5), P39-47, 1996
3.任意団体デート DV 防止ふくおか事務局(2012-2016)：実施のまとめ, 2012-2016
4.小澤美咲, 長谷川博亮：思春期・青年期におけるデート DV に関する意識と実態調査　デート DV への看護介入のあり方についての 1 考察, 日本精神科看護学術集会誌, 56(2), 311-315, 2013
5.山田典子, 山田真司：高校生の Dating violence の特性と課題, 母性衛生, 51(2), 311-319, 2010
6.武田道子, 大西和子：高校生のデート DV に対する認識および経験の実態, 日本看護学会論文集：地域看護, 42 回, 151-154, 2012
7.永松美雪, 原健一：中学生における親密な相手からの暴力認識を高める要因 お互いを尊重する意識の高さと慎重な性的態度, 母性衛生, 55(4), 752-758, 2015
8.須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環：高校生への DV 予防に向けての介入研究, 思春期学, 32(4), 404-412, 2014
9.永松美雪, 原健一, 中河亜希, 中野理佳：性行動に伴う危険を予防するプログラムの効果 性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組み合わせて, 思春期学, 30(4), 365-376, 2012
10.福島裕子：中学生のデート DV に関する意識調査～ジェンダー意識や自尊感情と暴力認識の関連性～, 思春期学, 28(1), 80, 2010
11.倉田真由美：高校生・大学生の相談状況と自己肯定感との関係, 思春期学, 26(2), 257-260, 2008
12.植田由紀子, 安東由則：高校生のデート DV に関する実態調査の分析－予防教育活動の実践から－, 臨床教育学研究, (16), 65-86, 2010
13.市川裕理, 石田貞代, 萩原結花：青年期男女のデート DV に関する意識－対象の特性・ジェンダー意識との関連－, 山梨県母性衛生学会誌, 11(1), 1-8, 2012
14.福岡県男女共同参画(2018)：高校生向け交際相手からの暴力防止啓発パンフレット, http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/jyakunennsoudvbousikeihatu.html, 2018.2.10
15.宮川充司, 大野久, 大野木裕明(編)：子どもの発達と学校　改訂版, ナカニシヤ出版, 京都, 163-173, 2010
16.内閣府男女共同参画局：交際相手からの被害経験, http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-6.pdf, 2017.12.19
17.齋藤益子, 井口一成, 高村寿子, et al：思春期における性教育のあり方, 思春期学, 27(4), 351-360, 2009.
18.須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環：中学生のための DV 予防教育プログラム開発と効果研究, 思春期学, 31(3), 384-393, 2013

The Elements of Effective Education for Preventive Dating Violence for Students : A Review of the Japanese Literature

Akino Kansui

Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Community Health and Home Care Nursing

Key Words　Dating violence, Preventive education, Junior high school students, High school students

Purpose:

The purpose of this study is to elucidate factors associated with effective preventive dating violence education for students in Japan.

Methods:

It was searched the Japana Centra Revuo Medicina for original articles using the keyword “dating violence” in Japanese until November 2017. It was considered articles associated with preventive education on dating violence or domestic violence for junior high school or high school students. In addition, summary articles and studies that were not associated with dating violence occurred in the close but unmarried situation were excluded.

Results and Discussion:

Six studies were identified: three observational studies evaluating the current status of dating violence and three intervention studies in preventive dating violence. These studies showed that the preventive education was effective especially among junior high school students and that the different education between junior high school and high school students should be provided. It might be necessary to evaluate the current status of dating violence among students before the preventive education, considering gender differences, the degree of self-esteem, sexual and love behavior. In addition, the importance of preventive education on dating violence should be recognized among teachers and families around the students.